

個の尊重と学校教育

—不登校児童生徒への支援に関する公開研究会の記録(2)—

小野 昇平*・本山 敬祐*・森 岩樹**・斎藤美佳子***

Respect for the 'individual' in School Education : Record of the public meeting for the study about the support to absentees (2)

Shohei ONO*・Keisuke MOTOYAMA*・Iwaki MORI*・Mikako SAITO*

Key word : 個の尊重	respect for the individual
不登校	absentees
公開研究会	public meeting
フリースクール	free school
親と子の居場所	places of belonging for children and parents

1. はじめに

本稿は2019年7月27日に開催した東北女子大公開研究会「個の尊重と学校教育2～不登校支援の現場から～」の記録である。

2018年12月1日に開催した第1回の公開研究会につづき、今回も不登校支援がテーマである。近年、不登校児童生徒を含めて夏休み明けに学校へ行くのが辛くなる子どもに対する様々なキャンペーンが見受けられる。そこで、今回は学齢児童生徒が夏休みに入る時期に2回目となる公開研究会を開催し、不登校当事者の困り感をはじめ、自分に合った居場所が見つかることで子どもや保護者がどのように回復していくのかを理解することを目的として、弘前市内で不登校や高校中退者およびその保護者に対する支援を行っておられる方をお招きした。

本稿の構成は次の通りである。第2節では小野が研究会の趣旨説明の説を兼ねて個の尊重と学校教育に関する論点を提示した。第3節では「ユースひろさき」代表の森岩樹氏より、フリースクールおよびサポート校における不登校児童生徒や高

校中退者支援についてお話しいただいた。第4節では不登校児童生徒およびその保護者に対する居場所支援を行う斎藤美佳子氏より、ご自身の学校教育との関わりをはじめとして「ひろさき親と子の不登校ほっとスペースきみだけ」の設立経緯や当事者支援から見えてくる課題についてお話しいただいた。第5節では本山が二名の報告に関連した文部科学省による不登校生徒の追跡調査や日本財団による調査結果を共有した。第6節ではパネルディスカッションにおける質疑の一部を掲載した。

第1回と同様に、本研究会は平成31年度大学コンソーシアム学都ひろさき活性化支援事業による補助を受けたものである。そのため、本研究会で得られた知見をより広く共有することが地域貢献につながると考え、記録を公開するに至った。不登校児童生徒や保護者に対する学校外の支援機関について、地域にどのような支援者が存在するのかを理解しておくことが、いざというときの支えになるものと思われる。

次節以降、文末注による補足説明や話の流れを大きく変えない程度の修正を除き、研究会当日の発表や質疑を文字起こししたものを掲載している。

*東北女子大学

**ユースひろさき

***ひろさき親と子の不登校ほっとスペース
きみだけ

2. 公開研究会の趣旨

本日の会は個の尊重と学校教育というテーマとなっております。昨年の12月1日に青森市にあります「あおりサニーヒル」から先生方に起こしいただき、1回目の研究会を開催しました。今回はそのパート2ということになっているわけです。

不登校児童支援というのが副題となっていて、主題が個の尊重と学校教育となっている理由を簡潔に述べるとすれば、子どもたち一人ひとりを尊重していこうということを強調したかったからで、不登校児童支援というものもそのような試みの一つだと考えているからでございます。

学校というというものも含めて、教育制度、そもそも制度というものは一般には必ずしも完全には両立し得ない様々な要素というものの均衡を図りながら設計されているということがありまして、そこでは例えば特定の個人の権利、これは私の権利というふうに言い換えてもよろしいかと思えますけど、それが多数の権利みんなの権利との兼ね合いで制約されなければならない場合も生じるわけです。しかし、そのみんなというは一人一人の私が集まってみんなになるというところでありますから、無条件にみんなが私よりも優先されるという理由は本来ないわけです。みんなが大事だけどみんなのためなら私は我慢せよというのは、ちょっと趣旨が違うのではないかなということですよ。

教育ということに目を向ければ、全ての子どもたちには教育を受ける権利があって、それは重要な私の権利です。日本においては教育というものは原則として学校という制度の中で提供されることになっています。しかしこそは、私のための学校でもあるんですけど、みんなのための学校でもあるということもあり、そうすると、種々の理由で学校に通えなくなってしまった子どもたちに対しては、みんなのための学校ではそういった教育を受けることができないということになってしまいうこともあるということですよ。

しかし、こういった子ども達に対して例えば学

校において個別にその子だけに対して教育を行うということは現実的には難しく、また、みんなのための学校というのはみんなのニーズを満たすために設計されているというふうなところもございまして、全ての私たちの権利というものをひとつひとつ完璧に満たすことが難しいか、場合によってはそういうことが不可能なことがあるのではないかということです。他方でだからといっていろいろな理由で学校へ通えなくなってしまった子どもたちの教育を受ける権利が保障されないままにしておくのはそれ以上に適切ではないわけですから、何かしら代わりの方法で教育機会の提供というものも必要になってくると。そういったところでフリースクールですとかが必要になってきたり、またそれ以外にもこういった子どもたちをその後どのようにして支援していくかということと、どうするのがその子どもたちにとってベストなのかとうのを考えていく必要があると思っているわけでございます。

一言だけ付け加えさせていただきますと、私もともと法律を専門にしております、学校の問題についてもいろいろ法律の観点から深く研究しているというよりは常々考えているところなんですけど、その観点で先日同じ法律の先生と話して出てきた話としましては、つい先日参議院選挙がありまして、18歳、19歳の投票率が非常に低かったと。つい最近までは18歳も選挙に行けるようになったんだということで18歳選挙権ブームというようなものがあったんですけど、そのブームも過ぎ去ってしまったようでして、やっぱり投票率というのが低かったままだったわけです。そうなることの背景にはどうしても先ほど言った学校とか、世の中の仕組みというのは基本的にみんなのために作られているもので、中にいる人たちはその中で私というのを出すことに少し抵抗を覚えるということもあると。要はみんなのものというのは所与のものとしてあって、その枠の中で私たちは生きるというような意識というようなものが特に若い人には根付いているのではないかなというふうなことをちょっと話していたわけですよ。

ういうところで今回の公開研究会のテーマは個の尊重と学校教育というテーマになっている次第でございます。

これからお話していただく不登校支援というお話も今の私の話もなんというか、いろいろと浅はかなところもあるかもしれませんが、そういった観点からお聞きいただけますと企画責任者としては幸いです。よろしく願いいたします。(小野 昇平)

3. フリースクールの現場から

みなさんこんにちは。今ご紹介いただきました森と申します。14:20まで、だいたい30分お話しさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、まず私はどんな人間かという話をさせていただきます。私は弘前に生まれ、四中学区で過ごし現在に至ります。まだ弘前南高校ができて2年ぐらい、周りはまだリング畑の所に生まれ、だから大体歳は想像できると思いますが、兎年です。

そんな感じでしたので、私の小中学校高校を通じて、そんなに荒れていたという記憶は無いのですが、ちょっと私が生意気な生徒でしたので、一つ上の先輩に目を付けられているという感じの子どもでした。あるとき、理由は分からないのですがその一つ上の男の人に殴られたことがありました。それからいろいろ考えるようになったのかな、と今にして感じております。まあ生意気だったのですが、逆に可愛がってくれるというところがおかしいですけど、そういう先輩もいたので、あの人に殴られて、みたいな話をしたらなぐさめてくれたということもありました。

時を経て成人になり、学校を卒業して、市内に第四城東土地区画整理組合という組織がありました。ちょうど国道102号線バイパスが新しくできたときに、あの辺を整理するという事業があり、その区画整理組合内にできた弘前流通団地協同組合という事業体に就職をしました。ご存知の通り、いろんな企業が張り付いていますが、そうした企業誘致したりとか、土地取得や建設資金を国

から借りる手続きと返済の取りまとめをしたりしました。そういう仕事に従事していたのですが、バブルが終わってその余波が弘前にもじわじわときて、やはり耐え切れなくなった会社さんが結構出ました。結果、その企業の社員の方の再就職をお手伝いすることに至りました。これが就労支援とのかかわりの最初となります。そんなことがあって、私自身も厳しい状況になりましたので、私も辞めました。辞めて、再就職しようと思ったわけですが、これがなかなか困難でした。当時から35歳を過ぎると再就職は無い、と言われておりましたが、本当に再就職はできませんでした。応募してもうまくいかず、仙台や東京で、と思って行ったもののなかなか就職できませんでした。

そうしてもがいている時期に周りの人から言われたのが「あんた何やってるの」という言葉でした。その言葉に対して「何やってるのって、仕事を探しています。紹介してくださいよ」とよく言い返しました。しかしこの時に、何かに所属していない人ってすごく生き辛いついていうのを初めて身をもって感じました。今もそうかもしれないですよ。何かに所属しての自分みたいな感じでない、ちょっと日本って暮らしにくくないかっていう思いがあります。いくら私の名前は森岩樹です、と言ったところで「は？」と怪訝な顔をされるのが落ちです。例えば、弘前大学何年生の誰々ですと言うと、「あ、学生さんね」と話は通じますが、個人の名前を言っても、それが何？みたいな感じはあると思います。例えば芸能界では、最近某女性グループとか男性グループに入っている誰々みたいなことをよく言います。私はよく理解できないのですが、本人たちはそれを良しとしてやっている、それはそれで構わないですが、何かに所属しての誰々というのが、すごく強い社会なのではと思っています。それを自分の就職活動を通じて気が付いたということになります。

その後、何かに所属しないと駄目なのだ、ということを実感して、キャリアコンサルタントという資格を取りました。その後、青森市アスパムにあるジョブカフェ というところに就職する

ことができました。それで若い人の就職の手伝いの仕事、いわゆる就労支援をすることになりました。そこは契約社員でしたので契約更新をせず1年で辞め、次に、若者サポートステーションという、対人関係がうまくいかない、学校になかなか行きづらい、仕事に就けないというような、例えば引きこもり傾向が強い人や就職困難者を支援するところに勤務しました。青森市で1年、その後弘前市で2年、その後再び青森市で土曜日だけ2年従事しました。その際、サポートステーションに通ってくる人たちと話をしていると、中学校全然行っていないとか、高校中退したとか、そういった話が随分と出てきました。大人も大変だけど、子どもたちももっと大変だよな、とその時改めて感じました。

サポートステーション事業では、従来県庁所在地にしかなかった施設を一挙に増やすという年度があり、弘前と八戸にも設置されました。その時に弘前で、と言われて勤務したのですが、その時のメニューに学び直し事業というのがありました。サポートステーション利用者の中に、高校中退の人が全国的に多いので高卒認定試験の勉強をして高卒に準じた資格を取らせて就労に役立てようという趣旨です。これはとても良いなと思い、力を入れることにしました。高校教員免許取得者を1名採用して、そのうえで（生徒の）募集をかけたら、5人くらい来ました。実際に通えたのは3人ほどでしたが、1年間学び直しといいますか、もう一回勉強したいという方のニーズがあることを実感しました。生徒の年代は17歳から30代半ばの人までです。ちょうどその頃仙台に行った際、夜間中学校を仙台市内で開講しているチラシを見て、勉強をもう一回する、というところは非常にニーズがあるな、と思ったのがそもそもフリースクールをやるきっかけなのかなと思っています。

残念ながらこの学び直し事業は1年で終了でした。加えてサポートステーション事業は国費ですので、毎年度県庁に入札願いのようなものを出す必要があります。競争入札です。残念ながら私の勤務先が負けてしまい、手を引くことに至りまし

た。それでも若い人の状況を知ってしまったので、若い人の手助けはするが、一方で自分の生活をしなくてはなりません。ですから、女性活躍推進事業や育児休業・介護休業、がんと仕事といった働き方改革のなかで企業さんを訪問して上記のことについてのご相談を受けております。その他にシルバー層の方の再就職ですとか、広く浅くお仕事に関わることをさせていただきつつ、フリースクールと通信制高校のサポート校というのをやらせていただいております。

去年の今頃そろそろやらないと駄目だな、と思っていたところ、フリースクール全国ネットワークから会長の奥地さんを弘前に呼ぶことが実現しました。そのことが、開校のきっかけです。フリースクールに関していろいろ考えていた時、今日後ほどお話ししていただく斎藤さんも動かれていたことも手伝い、大体このように人が動いてくれる時期というのは、流れとして良いきっかけなのかなとも思いました。そのフリースクールのお話を聞いた後で、土手町をぶらぶらしていたらちょうど空き店舗があり、大家さんに話をしたら決まってしまったというところです。ちょうどまちなか情報センターの斜め向かいで、そこを借りて9月に仮オープンをしました。

話があちこちに飛びましたので、レジュメのフリースクールとはというお話をしましょう。自己紹介の中でいろいろお話をさせていただきましたが、私はもともと就労支援系の人間で、また不登校になった経験はありません。しかし先ほど話しましたが、何かに所属していないと生きづらい今の世の中で、生きづらさを感じている若い人達と出会いました。またそれとは別に仕事を探していた時、予備校の先生をしていました。小学校1年生から大学浪人まで、です。小学校1、2年生のお子さんはお金持ちのご息が多かったです。通年通ってくる小中学生の多くはそうしたご息が多かったですけれど、ある時、中学校3年生の女の子が泣いていました。どうした？と聞いたら、親御さんと進路をめぐっていさかきを起こしたようでした。親御さんが昨日の夜来てその子供さん

に向かって「塾にお金を払っているのだから、もっとできないと駄目だ」みたいなことを言っていたようでした。結局そのお子さんが自分もこんなに頑張っているのに、これ以上というのは自分にはできない、無理だと泣いて訴えてきました。親心も分らなくもないけど、そういうふうにいる、強いられるというのはどういうことなのか、と思ってしまう。別の生徒さんは、風邪をひき学校を休んでも塾には来るといふ、方もいました。このように塾がその人にとって、居心地のいい場所だったのだろうし、居場所というものには家やそのほかのところにもあっていいのだ、そういえば大人は喫茶店や居酒屋で憂さを晴らせるけど、こども達の居場所とは何だろう、と思ったりもしました。こうした思いがフリースクールの伏線になっていたような気がします。弘前でフリースクールを開校したところで、どうなのだろうという葛藤は常にありました。ニーズがないからやらないのか、あっても運営できないからやらないのか。

ちょっと教科書的に言うとフリースクール、ご存知の方も多いかと思いますが、何らかの理由から学校に行くことができない・行かない・行きたくても行けないという子どもさんたちが、小学校・中学校あるいは高校の代わりに過ごす場所という説明がわかりやすいでしょうか。そういったいろんな事情を抱えるお子さんたちを受け入れて学びというか、学習以外の、人との関わりなどを互いに学ぶ場所になるのかなと思っています。フリースクールを開校するにあたっては、フリースクール養成講座をオンラインで学習しました。先に紹介した奥地さんが主宰されているところで、フリースクール概論とか実践など3か月程度勉強しました。最終回にこれからフリースクールをやる人に向けてみたいな話がありまして、お月謝いくらぐらいだと思います？という話が出ました。その時の話は、平均月 35,000 円とのことでした。この地域で 35,000 円はありえないのではないのでしょうか。かといって 2 万円だと運営できない。学校に行きづらい子どもさんを持つ親御さんに、

義務教育なのにさらに出費を強いるのは正しいのかと思いつつ、現実には困っている子供たちがいるのであればまずはやってみよう、とその辺は見切り発車でやってみました。

こうした葛藤があったので、ホームページで料金を載せなかったところ「なんで料金を載せないのだ」というクレームがあり、また直接電話で「料金いくらですか」と聞かれて「3 万円ぐらいでどうでしょうね」という話をしたら、「それではとても払えません」で終わってしまったので、ますます料金を載せる決心がつかずそのままお問い合わせくださいということにしてみました。このように親御さんからお金をもらうのが難しいというのがありました。そうは言っても子どもさんたちがなかなか厳しい状況にあるのは間違いなく、ある勉強会で、青森県の中学生の引きこもりの数が 38 人に 1 人というデータをお示ししていただいたので、やっぱり結構いるなということも思ったところです。

フリースクールについては例えば中学校、地域とうまく連携しているところもあるので、卒業とか出席扱いとされるケースも結構ありますが、弘前で開校したところでどうなのだろう、という不安は非常にあります。まずとにかくやってみて、批判があるということは関心が高いということでもあるので、やってみようと思ったところです。やってみたとこでじゃあ実際に来ているかっていうと来ません。

私は田舎館村に田んぼを借りて、米作りをやっています。作業は一年続くので、それに来ない？と言ってきていただいている方が一人います。男性なので、なんだかんだ言いません。私もあえて言いません。そんな関係ですときています。お母さんには今日タニシいたよというような話をしますが、私には一言も言わない。でも男同士だから良いやということで過ごしています。彼も今度は中学校三年生になるので、そろそろ進路の話とかを考えているとは思いますが、その辺はあえてしていません。

進路の話が出たので、通信制高校の話をしします。

通信制高校という、かつては弘前高校に通信制課程がありました。今は尾上総合高校に移りました。先に述べた高卒認定のときに、別に通信制高校自体をやらなくてもサポート校っていうものがあるという話も知っていたので、じゃあサポート校をやったら良いんじゃないか、と思っていたところ、八戸市のあおば学院さんとういところがあるということを知り見学をさせていただきました。そのうえで、私は予算的に大きいことができなかったのですが、塾みたいな形態ですが、通信制の提出課題を一緒に学習するサポート校というのをやろうということにしました。サポート校をフリースクールと一緒に開いたのですが、サポート校は意外にも1人すぐに希望者が出ました。自分でもびっくりしていますが、前の高校をちょうど辞めてすぐの今年の2月の下旬に来ていただいております。前の高校は辞めるという意味が強かったものですから、じゃあそのままこちらで勉強を続けて3年生をこちらでやりましょうという話をさせていただきました。ちょうどその時期が転校ということになり、卒業年次が他の人たちと一緒にいるところを本人も親御さんも望んでいたのです、そういう手続きを取らせていただいております。

現在は非常に勉強を熱心におられて、たまには授業中居眠りもありますが、提出物はしっかりしています。卒業後の進路を尋ねたところ、上の学校に行きたいという希望を持っており、じゃあ頑張りましょうという話をしているところです。さらに、5月ごろ、話を聞きたいという人が保護者の方とお出でになられました。その時点で私のところは生徒さんお一人のお月謝しかもらえていないので、これは難しい、だめなのかも、と耐えられる運営資金も用意していなかったのです、せめて現在の方が卒業するまでは続けよう、別事業で生活を安定させようと思っておりましたので、新規の方については、受入れて良いのだろうかという葛藤がありました。そこで、県内にはいろいろな通信制あるいはサポート校もあるので他校と比べてみてください、と逃げました。

通信制高校については、例えばこの辺でいくと公立では尾上総合高校の中に通信制課程があります。あと、弘前市内に住んではいるもののそれゆえ弘前市内の学校に通いたくないという人もおります。誰かに会うのが怖い、今どこに通っているのと聞かれても教えたくないということだと思います。そういう人はどこに通っているのかというと、五所川原にあります私立の高校さんの通信制課程、青森の私立の通信制に通っている人もお出でです。最近、N高という学校さんがありまして、ああいうところに行っている方もおいでになる。(通うというよりネットで授業を受けたりしている) そうした様々な学校も今あるので、そちらに行ってみはどうですか、覗いてみたらどうですかとお話をさせていただいております。

先ほどの方の例に戻ると、ありがたくもこっちに来たいというお話をさせていただいたので、いや実は土手町のところは一端締めるのですが良いでしょうかという話をしたら、閉めてもそれでも関りとして教えてくれるなら良いですと言っていたので、今通ってきていただいております。

サポート校の話をしていただきますと、大体運営母体というのは予備校さんに代表される、学習支援する産業さんが多いのかなと感じています。生徒の学習とか生活支援を行うことを目的にしています。基本的に入学資格というのは設けられていません。試験はありますが、資格は設けられていません。通信制高校自体、例えば尾上総合高校さんとか公立では授業料は安いですが、われわれサポート校という形態を使って学習をすると高くなります。そもそもその通信制高校自体がひとつの母体があって、私は日頃の学習のお手伝いをする塾講師みたいな立場ですので、学校に収めるお金とサポート校に収めるお金がダブルでかかるというわけです。ですから、フリースクールも同様ですが、結構お金が大変です。親御さんとしてはどうなのだろうなと思います。それは親御さん次第ですので、失礼な話なのですが、現実的に金銭面ではいろいろ考えてしまいます。

その次に不登校と教育機会確保法に触れます。教育機会確保法というのは、不登校の生徒さんが増えてきて、学校復帰一辺倒で果たして良いの？という声が超党派の議員さんの中から出てきました。中心になったのは、馳浩さんです。馳さんは新日本プロレスに在籍されていたプロレスラーとしてもつとに有名な方ですが、もともとは高校の先生でした。プロレスラーという夢を断ちがたく、教育現場からプロレスラーになったという方です。その後政界に進出され、文部科学大臣をされた方です。馳さんの書かれたものを読むと、小学校か中学校かかるときに、学校に通ってこれなかった同級生がいて、あいつ今どうしているのだろうというのがずっと心に残っていた。教育行政に関わっていると、不登校の子どもさんが非常に多く、あの時の彼も不登校だったのだろう。こうした現状を自分がなんとかしなくては、ということで取り組まれたのが、この不登校と教育機会確保法です。これは小冊子としてまとまっているのですが、そもそも教育機会確保法というのは、別に学校っていうのに戻らなくてもいいということを書いている法律です。それぞれの子どもに合った教育というのがあるので、それを確保して国や自治体は子どもや親を支援しましょうという法律です。

学校に行きづらい子どもさんたちとか親御さんの話を聞いていると、学校に戻らなければいけないという、何々しくちゃいけない、その学校に所属しているのが当たり前という風潮と申しますか、戻ること一辺倒で果たして良いのかということです。ただ成立したからといって、現場でどうなのかというとそれはまた別問題で、教育現場に行き届いていない、現場と齟齬があつてうまく機能していないところが現実としてあります。ただ、法律としてはあるということは覚えておいた方が良いでしょう。良いのではないかと思います。

次は6番子どもをとりまく環境です。子どもを取り巻く環境というのは改めて書くということ自体、現状はよろしくない状況だろうと感じています。去年斎藤さんが主催されたときに話が出たと思いますが、青森県では38人に1人の中学生が

不登校ということだそうです。実際にもそれぐらいはいはそう、でも実はもっとという感じがあります。不登校の背景の要因は人それぞれです。一様にこれが要因だという事は絶対に言えません。

私は言い忘れましたけど、生活困窮者支援という事業にも参画していました。生活保護まで至らない人に、就労をしていただくことで、生活保護をもらわないようにしよう、簡単に言うたそうした事業です。逼迫する財政の中で福祉的な要素は常に不利な状況にあります。しかし、仕事をすることで生きがいを得る人も実際にお出でです。ただこの生活困窮者支援を通じて、原因の一つは青森県の最低賃金に代表される、収入が低いということに起因する家庭環境、これが大きいと感じています。ある例としては、子どもがバイトしてきたお金をお父さんお母さんが生活費に使うのは当たり前、車の免許を取るために子どもが働いて貯めていたお金に手を付けるお父さんお母さんがいるというのがあります。このように、貧困といいますが、働き方といいますが、お父さんお母さんも頑張っているけどそもそも非正規の仕事ですとか、正規のお仕事でも週3ぐらいしかお仕事できないということがあつたりすると、どうしてもそうならざるを得ないと察します。本当に厳しい状況です。

ただ、子どもとして生まれてくることはその子どもは生育環境を選んだり望んだりできないことですから、なんとかならないものか、社会的な配分は機能しているのか感じます。その中で先ほど、小野先生から個の尊重ですね。今回の研究会の個の尊重という話を聞いて、個の尊重というのは子どもも入る。ところが、その子どもの個の尊重というのはなかなか厳しい現状があつて、例えば子どもの権利については青森では条例がありますよね、でも弘前には無い。文化都市を標榜しているのに無い。こういったことで子どもをとりまく環境というのはすごく厳しいし、大人ができることは手を尽くすことが必要と思います。今通ってきている通信制の人たちにお話を聞くと、中学校に入って、歴然たるカーストがあつたと教えてく

れました。ヒエラルキーです。一番上はどういう人？と聞いたら、親が金持ちで、スポーツができて、勉強ができる人がトップに君臨しているそうです。そういう人は高校に入ったら入ったで、同様な連鎖が繰り返されているかもしれません。教育費などいわゆる経済的な目に見えるところで学校内外にも格差がしっかりあって、校内外の居場所と言いますか、その自分の安心していられる居場所から一度逸脱してしまうとみんなからいじめられるみたいなのが今でもあるようです。

子どもには子どもの社会というのがあります。が、実はやっぱり子どもの社会といっても大人の社会の縮図みたいなものと思っています。家に帰ってお父さんお母さんが人に対しての悪口を言うのは理解しますが、子どもの前で話すと、子どもは聞かぬし、学校に行くと言います。中には先生の悪口を子どもの前で話す親御さんもいると思います。あるいはあの子のお父さんお母さんがどうだという話を家で話す。あの子のお父さんお母さんはああいう感じ、みたいな話をすることもあるのだ、と思います。悪気なく。悪意無いのが本音だったりもするので厄介です。そういう大人社会の縮図は子どもの中にもあるし、子どもに即影響を与えるし、そうした大人の会話を子どもたちはよく聴いて理解もしています。ゆえに子どもの前では、耳に入れて良いことと悪いことをわきまえて話すべき、と強く思います。

先週の東奥日報夕刊に、ひきこもりの話が載っており、その中に生産性という話が出てきていました。今般の働き方改革で取り沙汰されている一つの文言が生産性です。日本人は生産性良くないです。バカンスをとる某国より生産性は悪い。だからこそそのデータをもとに、日本政府は生産性を上げて効率よく仕事をしましょうと言っています。確かにそういう一面はあるのかもしれませんが、生産性を上げて効率化して懸命に働く。そればかりで果たして良いのでしょうかという疑問があります。憲法の国民の義務で、納税・勤労・教育があります。確かにその通りです。しかし、憲法でそういうことを明記するというのは、国民が

主体的にやろうということであって、国が命令することでは全くありません。しかし現在の日本人は得てして上から言われたとおりにすればよいというか、寄らば大樹の陰が安心。しかし自然権としてまたは個の尊重という観点からはストレスがたまるとは思いませんか。こうしたストレス満載の大人の社会も生き辛いゆえに、子どもの社会も生き辛いのかなと考えます。明日は明るい日なのに、明日は憂鬱で、良い暮らしができる時代というのはなくて、これから若い人たちに何かを強いる社会になりつつあるのでは、と思います。

一方地域に目を向けてみますと、フリースクールとかそういう箱もの居場所としてはとても必要だろうと思う一方で、本当はこの居場所に来れば、どうして今日学校行かないの？髪染めた？という余計な詮索をしなくても良い場所というのは、本当は地域でたくさんあれば良いだろうと思いますね。この話は斎藤さんに言っていただこうと思います。そういうふうになると居心地のいい場所になると思います。

最後に大人の話に戻ると、大人の世界はちょっと変わってきて、いわゆる時短、短時間休暇とか育児介護のために休んでも良いよと変わってきています。時代も変わってきたので、新しい働き方が出てきたというのは社会が変わっていく一つのきっかけになるのではないかと思います。こういった変化が子どもの現場にも下りてくるとよいのですが、一方で学校の先生の働き方というのは本当に大変です。学力が高い人が学校の先生になることが多いので、できないって多分言えない。それに乗じて仕事量が半端なさすぎると思います。だから学校の先生たちも、いい意味でちょっと息を抜く時間が必要なのではないでしょうか。時間も過ぎてしまいましたので、この辺にします。

(森 岩樹)

4. 当事者支援の現場から

ひろさき親と子の不登校ほっとスペース「きみだけ」を主催しています斎藤美佳子と申します。あんまり人前でお話することが日常ではないので、

結構緊張していて嘸んだりとか声が小さくなって後ろの人が聞こえにくくなったら合図をしていただけだと大変助かります。よろしくお願いします。

まず自己紹介です。1974年北海道生まれです。北海道だったんですけど親が高校教員だったので、大体7年おきに転勤および引っ越しをする家庭で育ちました。最初は深川、それから日高門別、札幌、岩見沢。小学校5年生の3学期から長期不登校をしまして、その後引っ越した札幌市で、北海道で初めてできたフリースクールさとぼろの一期生になりました。さとぼろに通いながら中学校もほとんど通わないまま卒業して、中卒のままだんだんと社会出て二十歳のときに北海道の親元を離れて完全に社会に出ます。それからいろいろありまして2012年に弘前出身の夫と当時2歳の息子を連れて弘前に移住してきました。現在、小四の息子が不登校中です。

まず学校との付き合いなんですけど、普通に小学校は深川小学校に入りました。旭川の隣の大体人口3万人ぐらい、この辺だと平川市ぐらいの町の田園の街です。すごく怖い年配の女性が担任の先生で、連帯責任で廊下に立たされるとか、小学校入ったばかりでまだ様子もわからず大あくびをしていたら「何やってるんだ」と名指しで叱られたりとかして、怖いと思って学校になかなか行きたくない、でも引きずられていく。怒らないからおいでって言われて中に入る。後で呼び出されて怒られる、話違うじゃんみたいな、そんな感じでした。それから小学校2年生のはじめに大体人口9,000人ぐらいのサラブレッドを出して海があって沙流川という大きな川に鮭が遡上してくるような街です。そこで、小学校2年から中学校2年の終わりまで通います。教員住宅が小学校のすぐ隣にありました。急いでいるときは学校のグラウンドを突っ切っていけばもう1分かからずに学校に入れるぐらいの至近距離です。そこで不登校になりました。

大体のところ優等生ではあったんですけど、なんとなく女子のコミュニティに居心地が悪くてですね、男子と遊んでいる方が多かったんです。小

学校高学年になってくると男子もあんまり女子を入れてくれなくて、だからといって女子の複雑化しているグループ関係にとっても入り込めない。誰と誰がリボンの色が被ったの被らないのとか誰が誰と仲が良いから誰と仲良くしちゃだめとか、お揃いでトイレに行こうとか、御免被りたい感じだったんですね。優等生だったのもあったので割と孤立しがちというか、当時80年代でまだバブルが崩壊する前でネアカがハッピー、ネクラがいてないみたいな今でいう陰キャ陽キャみたいな感じのカテゴリがしっかりありました。先生にひいきされているガリ勉みたいなことを言われるのが辛くなって、学校の先生ともいろいろあってそれまでも何回も学校に行きたくない、でも行かなくちゃみたいな感じで何日か休んでまた来たりとか、親とか友達とか先生とかに迎えに来られながら学校に行ったりとか、そういった時期があったんですけど、小学校5年生の3学期頃にいよいよ神経的にもう参ってしまって。尖ってる物が見られないとか、ビニールのカシャカシャいう音とかももうだめになるとか、ちょっと神経症的な症状が出始めて、教員だった親がそういった生徒を見たことがあってこれはもうちょっと休ませなきゃいけないと判断してくれて長期不登校になることが認められたという感じでした。

ただ、当時不登校ってまだ言葉としては登校拒否と呼ばれていた時代でして、保健室に登校してみたりとか校長室に登校してみたりとか、校長室に登校ってすごく居心地が悪いんですけども、先生と二人きりでとか。あと特別学級に6年生から編入したりしました。今で言うと支援学級とかサポートルームとか発達障害系の方とか割と多い。今子どもが小学校に行っているとサポートルームの生徒ってこんなに多いんだってビックリするんですけども、当時は600人の児童数の中で特別学級に通っているのは2人みたいな。ちょっと知的障害が入っているぐらいの子じゃないとそういう学級には行かない時代でした。だからちょっと優等生だった私がそこに編入したのは割と騒ぎになって、休み時間にクラスメイトとかが見に来た

りとか、そういうこともありました。

小学校を卒業して、中学校はだいたい家から徒歩30分ぐらいのところなんですけど、一応制服も来て頑張ってると思うんですけど、なにせ町に小学校も中学校も1校ずつしかないところだったので、全く人間関係がリセットされないまま持ち上がりなんです。すごく頑張ったんだけど、ゴールデンウィークが明けたらもう行けなくなりました。

それでフリースクールに通ったきっかけなんですけども、中学校2年の終わりで父親が札幌に転勤になりました。7年間富川町にいたので、私にとってはすごいチャンスだったんですね。これまでの自分を知っている人がいなくなる。私が学校に行けなかったことや、真面目なネクラだと言われていた子だっただけのことを知っている人が誰もいないところへ行ってやり直しができるということで、頑張ってる今度は真面目になりすぎないようになるべく女子のグループに合わせて当時の流行りのアイドルの話とかもなるべく合わせながら、ちょっとおちゃらけたりもしながら頑張ってるんですけど、やっぱりゴールデンウィークが明けるとですね、体力気力が途絶えてしまって行けなくなりました。

これって本当にどうしようかなというときに当時アイドル雑誌の、今ローマ字になっている『MYOJO』が漢字で『明星』という時代だったんですけど、今世田谷区長の保坂展人さんが連載もってらしたんです。学校についてのいろんなレポートを書いている。いじめのことであったりとか、体罰のことであったり。たまに不登校のこともありました。それを見ている時に、北海道に不登校の子が通うフリースクールがオープンしたという記事が載ったんです。そのオープンしたところの代表の方が前の日に日高から高速バスに乗って母親と一緒に小児科からいろんなカウンセリングの場所とか親の会とか行ってたんですけど、その中で一番自分がしっくりきたなという印象を持った方が代表だったんです。あの人がそういうのを始めたんならちょっと行ってみようかなとい

うので、その記事に書かれていた電話番号に自分でかけて見学に行き、初めてだったんですよね、その時に自分以外の登校拒否の子がこんなにいるっていうのを初めて見たんです。それまでは日高にいたときは、日高管内でお宅のお子さんだけですと親が教員に言われるような、すごく広い日高管内で私たちしかいない。私と3つ下の私の弟も数か月後に不登校になっていたの、私たちしか学校に行けない子はここにいないんだってのはすごく感じていました。

だけどフリースクールに行ったら、まあすごくみんな解放されてはっちゃけた子どもたちがたくさんいて、まだツッパリとかヤンキー文化が結構残っていたので、剃りこみ入っている人とか、金髪の女の子というタイプがいれば、スポーツやりましたという男の子がいれば、アイドル目指してますというすごく可愛い女の子がいたり。なんかみんな普通に、学校に本当に行ってなかったの？って思っちゃうぐらい、普通の子たちに見えるんです。そのフリースクールに通う中で、自分が一人じゃない、いろんな子たちがいることで、私が特別おかしかったわけでもないし、親の育て方が悪かったわけじゃないんだということを実感することができました。

フリースクールさとぼろという名前なんですけど、さとぼろで自分たちの体験の作文を集めてそれを劇にして上映するという活動をしていました。登校拒否を考える会の全国大会というのが年に一回、これは今も不登校を考える親の会として全国大会を持ち回りでやっているんですけども、この東京大会にフリースクールさとぼろのみんなで飛行機と電車と乗り継いで上映するために行ったりもしました。その時の経験から、演劇ってすごく面白いなって。実際にそこにいる人たちと観ている人たちがリアルタイムに心が通じていく様子とか、終わった後の拍手とかお客さんの涙とかそういったものを見ていて、演劇の魅力にすっかりはまってしまいました。札幌だったので小劇場はいろいろあって、劇団のあちこちに観に行ったりとか、演出でそのフリースクールに来ていただいて

いた方のアマチュア劇団にお手伝いに行ってお手伝いとか、ちょっと小道具係とかエキストラ的な役とか、そうしたことをお手伝いしながら大体18歳ぐらいまで演劇のところに通いつつ、昼間はバイトをしたり徐々にという感じですね。演劇やっているとなんか舞台に出てたの？と言われるんですけど、たぶんこの時ぐらいですね。これは少年役で出てたんですけども、これをやりながら私は立つ方は向いてないなと思ひまして、その後は音響効果とか小道具係とか、裏で支える方をやっていました。

その後二十歳のときに東京から来た職業劇団の札幌公演のお手伝いをしまして、それをきっかけにしてその劇団に入ることにしました。当時二十歳になったばかり、1994年の暮れのころに東京に行きまして当時60人ぐらいの劇団員の人が出たのかな、私と同じぐらいの若い世代の人から、上の創立メンバーがもう60代にさしかかるといふ人たちと一緒に朝から晩までほとんど一緒に過ごすという生活ですね。お芝居も稽古もそうだし、それから地方事務所を作ってその地方で公演したいときはいろんな町の人たちに呼びかけていくんですけど、その地方制作事務所と一緒に寝泊まりしながら先輩たちと仕事をしていくという、割とプライベートも無いぐらいの集団生活の中に入りました。

最初は学校がダメだった自分が果たしてそんな集団生活に耐えられるんだろうかという不安はあったんですけど、やっぱり演劇をやる人はどこか変わっているんで、演劇で食べていこうとする人たちの集団の中に入ると、学歴も全然関係ないですし、コミュニケーション能力は私にしても大学を出た先輩たちにしてもそんなに変わらなかったんですよ。大学を出た先輩で体育会系の人たちはやっぱり体育会系のノリがあってちょっと違ったんですけど、いきなり呼び捨てにされるとか。ただ、入った劇団はあんまり上下関係が厳しくないところで、先輩も60代の人たちがお互いにニックネームで呼びあったりするアットホームなところだったので私はそこで社会性を育てても

らったなという感じがしています。ここで例えば事務をやりながらパソコンを覚えたりですとか、小道具係をやったりとか、あとは音響スタッフとして公演について回るほうが多かったです。照明さんはチームでやるんですけど音響って割と一人でやるので、一人で黙々と機材を運んで設置してサウンドチェックをしてっていう感じでやりました。あとインターネットがちょうど普及し始めたころだったので、自分でホームページの作り方を勉強して劇団のホームページを作って運営するとか、結構支援者の方が多かったんで、その支援者の方に送るニュースレターの編集とかをやったりしていました。大体パソコンの使い方とか文章の書き方とか発信についてはこの時にベースを学んできたかなと思っています。

話は飛ぶんですけど、私の子ども、男の子がいるんですけど小学校に入りました。たぶんこう自分に似てあんまり集団生活になじまない感じかなと思っていたので、それでも学校に行った方が楽だなというのは自分の経験から思っているんで、行けなかったら仕方がないけれど、楽しく行ければ本人にとっても親にとっても楽だなということは感じていたので、特に学校の悪口は言わなかったし、自分が不登校していたことも言わなかったし、ランドセルもちゃんと綺麗なのを買ったし、小学校一年生のときには進んでPTAの役員をやったりもしました。私みたいに高学年になって不登校になったときに役員やってたら具合悪いなと思って早めに済ませておこうという算段もあったんですけども。目論見通りでしたね。一年間きっちりPTA役員をやって、彼が二年生になって二年生の途中ぐらいから本格的に学校に行きたくない。彼の場合は私とはキャラが違うので、優等生でどっちにも気をつかえずぎて疲れて折れてしまった私とは違って、彼の場合は最初から「学校なんで嫌なの？」と聞くと「長いから」と言っていて、学校だから仕方ないよねという感じです。

今は四年生です。小学校二年生の当時この弘前エリアでは不登校の親の会とかフリースクールが無かったですよね。移住してくる前からもしも、

移住してくるとき当時2歳でしたけど、もしもこの子が将来学校へ行けなくなったときに青森県にそういうことを受け入れる場があるんだらうかってネットで検索したんです。そうしたら無いですね。表立って活動している親の会とかも見当たらなかったの、覚悟してやってきて。いざ彼が学校へ行かないとなったときに、さてこれはどうしたものかと思いました。

昨年なんですけど、「#不登校は不幸じゃない」という活動を、不登校経験者で今は起業しています青年実業家の小幡和輝さんが全国100か所で夏休みが明ける前に子どもの自殺を止めようって、学校に行くのが辛い子の居場所を全国100か所でやろう、是非地元でやってくれる人を募集しますというのをTwitterで発信されていたんです。私そのちょっと前から小幡さんのことをフォローしていて、不登校の経験の本を出すクラウドファンディングをやるというのを支援したりして応援していたんですけども、これはちょうど良いかなと。彼は結構発信力が強くてフォロワーも多い人だったので、この全国100か所でやるよというコメントに乗っかることで、弘前でこれをきっかけにして親の会とか不登校の子が出会う場を作っていれば良いかなと思ったんです。その時の開催ガイドラインとしては、主宰チームに不登校の当事者や子どもの気持ちわかる人がいること。それからイベント名は「#不登校は不幸じゃない in 弘前」とつけること。去年なので8月19日の日曜日の午後1時から5時まで。参加費は無料。会場はクローズの場所。参加対象は学校は辛いお子さんやその保護者および元不登校の経験がある人。不登校の経験が無い参加者は主宰メンバーの知人で信頼できる人に限るといったガイドラインで、あとは主宰者にお任せというスタイルでした。だからどこの会場を借りるかとか、どれぐらい経費をかけるかとか、どれぐらいの人数に呼びかけるかというのも4時間というイベントの期間を何するかというのも全く主宰者任せの形で、とにかく全国100か所にそういった参加できる居場所をつくらうというムーブメントでした。

私は「さいとうサポート」という個人事業主をやってるんですけども、「さいとうサポート」ブログとして結構地域情報をたくさん発信していました、結構読んでいただいている方が多かったんです。その中に自分の不登校体験談を時折地域情報に混ぜて書いていたので、自然と実は自分の子も不登校になっているんだよねみたいな相談を受けたりとか、全く別のことで出会った人が最近ちょっとうちの子が学校に行きにくくてみたいな相談を受けたりもしていました。だから多分数人で集まるだろうという目論見がありました。

やっぱり私が最初に田舎の町で、しかも教員の子どもとしてその町にいて不登校になったというのはかなり孤立しててですね、道を歩いていれば〇〇先生のお子さんみたいに声がかかるぐらいにその人その人がくっきりわかってしまうという町だったんです。札幌の病院まで2時間ぐらいかけてカウンセリングに行ったりとか、札幌に引っ越してやっとフリースクールに通ったりする中で自分はこの生き方で良いと思うことができるようになったので、やっぱり孤立しているのよりもなるべく同じ経験をしている人たちで集まって、どんなことがあったとか今こういうことを思っているとかっていうのをざっくばらんに話せる場が欲しいなと思ったんです。

これはさっきお話したんですけど、親の会とかまだ無かったので作ろうと。実際に去年の取組としては、5月10日にこれ小幡さんが提唱しているやつを私やりますとTwitterとFacebookで開催表明をして、ぜひ力を貸してくださいと呼びかけをしました。14日には、去年はヒロロだったのでヒロロの会場を予約して、18日にブログ上で実行委員を募集しました。そしたらですね、全然私は知らなかったんだけど、私のブログやTwitterを見て応援してくださっている方がいたんですね。発信し始めてから何日かのうちに全然知らない方から実はうちの子小3で不登校してるんです、斎藤さんのブログを読んでいましたっていう方からメッセージがきたりとか、本山先生からもそういったつながりからで実際に会ってお話したりと

か、やっぱり自分が名前を実名で出して不登校の経験をこの地域で書いていたってことは結構見られていたみたいで、力を貸してくださいと言ったら、いろんな方が、私が全然知らなかった方からメッセージや声がけをいただきました。

Facebook グループを作って第一回の実行委員会を開いて、ここで7人参加、これがほとんど親の会みたい感じで集まっている方がそれぞれ不登校の子の親御さんであったり、自分が経験したという方だったんです。だから自己紹介し始めると1時間ぐらいかかって、2時間のミーティングのうち半分ぐらいは自己紹介みたいな感じで、実行委員会を5回ぐらいやって当日の準備をしました。

なんだかんだで実行委員30人ぐらいになりまして、借りていた部屋が定員28名だったんですけれども、何日か前にもう満室になるという状況になったんです。それで別のお部屋を借りてZOOMというSkypeみたいなアプリで動画中継をしたりとか、急遽対応したりしました。当日ふたを開けて見ると参加者は45人、うち実行委員の方は25人。実行委員の方もほとんど当事者性のある方ばかりです。内容としては発起人の小幡さんの動画中継が最初にあって後は地元で任されていて、不登校体験がある人と3人の発表とか、弘前からカナダに留学している女の子が不登校すごいじゃんというプレゼンテーションをカナダから動画でしてくれたりとか。それから全国100か所の中でもここが珍しかったんですけれども、弘前市の教育センターのフレンドシップルームという不登校の子が通う教育委員会の施設があるんですけど、そこの主事が参加してくださって。実際に私と対談する形でフレンドシップルームはこういう活動をしていますよという紹介をしてくださったんです。

そのときに弘前市の不登校の状況っていうのも伺いまして。ちなみに不登校というのは、年間30日以上病気などではない理由で欠席している人を文科省では不登校と定義しています。弘前では140人だったかな、小中学校合わせて。フレンドシップルームに来ている人は年間のべ40人ぐら

いということで、全国的には不登校の数は割合としてはちょっと少なくって、フレンドシップルームみたいところは都市部にあるんですけども、大体10%ぐらいのお子さんが利用されているそうなんです。だけど、弘前のフレンドシップルームは、それが3割以上にのぼるという取組をされていて、こんな活動があるよというのを実際にお話されていたので、これは参加されていた親御さんからも大変好評いただけていました。

前半の2時間は体験発表や教育委員会からのお話があって、後半はそれぞれ実行委員会の人たちが特技としているあるいは趣味として持っているものを持ち寄ってカードゲームとか、パステルアートとか朗読体験とかセラピーとかそういうブースがあって、あと座談会ブースを作っておいて、そこでお互い交流するという形で4時間やっていました。

今年のチラシについてはお手元に配布させていただいていますけども、今年は8月18日に、ヒロロがいっぱいだったので、弘前の駅前記念会館という知る人ぞ知る公民館的な施設をお借りして開催します。当事者や親の方は当日でも受け付けるんですけども、そうでない、何か関わりたいという方は事前に実行委員になって参加していただければありがたいです。去年参加していただいた方が今年は実行委員として参加していただいたりもしています。

この2年目の取組として、発起人の小幡さんが全国行脚として全国の主宰者のもとを回る県庁所在地が基本だったんですけど、青森はちょっと青森の会場の都合がつかなかったので弘前になりまして、小幡和樹さんが7月から8月の1か月間47都道府県を回るというハードスケジュールの2日目に弘前に来て交流の座談会をしてくれました。このとき平日の午後だったんですけども、16人が参加しました。内訳を言うと、小学生一人はうちの子なんですけど、小学生が2人、中学生が1人、通信制高校生が2人、あとは大人の人たちで16人という感じでした。

やっぱり私も不登校経験者ですけども、何分

もうすぐ45になる世代でどっちかというとお母さん側の方なので、小幡さんみたいに20代の方が10代の子と話すとはまた違ったすごく近い距離間でいろいろ話を聞きだして、私があんまり遠慮してしゃべれない子に話しかけないでいたところ、彼の場合はどんどん「普段家で何してるの？何が好きなの？スライム好きなの？それすごいじゃん」ってどんどん話しかけていくと、あ、しゃべったみたいなきもちがありました。そういった不登校をしていた人が、彼は今大学生でもあって中学校を出てから定時制高校に行って、昼は働いて夜は定時制高校で皆勤賞取るぐらいにずっと定時制は行ったそうです。高校3年生から起業して今の会社の代表をやりながら和歌山大学にAO入試で入って大学はあともうちょっとで卒業できそうなんだけどなかなか卒業しないで、この活動の全国行脚をしたりしています。

私の世代、30年前の不登校の世代だとあんまり高校に進学する人もいなかったし、まして大学に進む人なんて同期生の中に聞いたことが無いんですけれども。専門学校とかは結構いますが、大学まで進もうってのはあんまり聞かなくなりました。だけど、今は結構若い世代の人たちを見ると、通信制高校に行ったり定時制高校に行ったりして、そこから普通の大学に入って社会に出て行くという方が非常に増えています。これはちょっと自分の世代のときとその時のフリースクールの子たちもその後しか知らなかったもので、今はそういう感じなんだなというのをすごく実感しています。

通信制高校は生徒数がずっと微増しているそうです。子どもが少なくなっているのでもこの学校も生徒数は自然減しているんですけど、通信制高校は維持または微増しているそうなので、割合としては増えているということなんですね。そういった小学校、中学校には行けなかったけれどもその後こうやって大人になって社会に出て行っているという姿を身近に見せられることが今悩んでいる子とかその親御さんにとって大事なかなと思っています。

そんなわけで、去年8月をやってから、ひろさ

き親と子の不登校ほっとスペース「きみだけ」という名前のサークルを立ち上げてまして。これは月に1回ヒロロの子育て支援センターで開催しています。これは参加費無料で、告知はホームページとSNSと口コミ。初回のみお申し込みをいただいています。通ってきている子は小中学生の子で不登校中の子や、保健室には登校できている子や、フレックス登校って書いてますけど、時間をずらして遅れてだったら登校できている子という子が来ている子と、違う学校に通う通信制高校生が2人、あとは不登校経験のある学生や社会人、それとその家族ですね。親御さんも来ていますけども、珍しいところでは同居しているおじいさんも来ています。ざっくばらんに今こういう感じなんだよねということをお話したりだとか、子どもたちはゲームやったりとか、この間は大道芸人の人が去年の実行委員の人が立ち寄ってくれて、次の日のイベントに出る相方の人と一緒にバルーンアートとかジャグリングとかのパフォーマンスを見せてくれてすごい盛り上がったんです。20人ぐらい参加していたので、多目的室がパンパンになってすごくワイワイしていたので、初めて来たお母さんが一瞬「あ、間違った」と思って締めちゃったという、大丈夫ですよこっちですよということもありました。私がこぎん刺しを趣味でやったりもしているので、こぎん刺しを教えたりってこともリクエストでやったりもしています。

やっぱり親御さんも最初に参加してきたときに、それまでやっぱり弘前の中にもすごい孤立した中にいた。だけど、こうやって来てみたら本当にいろんな子がいていろんな親の人たちがいるということで、この前参加した初めての方も自己紹介のときに涙ぐんでしまって、やっぱりほっとするものがあつたんですよね。そのちょっと前から参加している方も自分のその時のことを思い出して一緒に泣いちゃって二人でワイワイ泣いて私までなんか危ないって感じのことがあつたんですけど。気兼ねなく不登校のことを話せるというだけでも、すごく気が楽になったということをお話されています。

どうやって見つかるかというところなんですけど、私が「きみだけ」のホームページも作っているんですが、ホームページに開催日程を毎月載せて更新しています。あと「さいとうサポート」ブログの方でも「きみだけ」の活動をたまに紹介したり「#不登校は不幸じゃない」の活動を紹介したり、自分の不登校経験を載せたりもしているんですけども、そうやって真面目に更新していると「不登校 弘前」で検索してきたときに1位から5位までこの関係で埋まるということになりました。「弘前 不登校」で検索すると3番目か4番目に市役所が作った教育センターを紹介するページも出てきますが、やっぱりWEBで皆さん検索して情報を見つけるので、ホームページを見てきましたとか、Twitterは何でも呟いているので、Twitterを見てきましたという方も結構いらっしゃいます。そういったWEBを押さえているのも結構大きいかなと思っています。

さっき、ちょっと森さんのお話の中でも出てきたんですけども、平日にちょっと元気になってきた子どもと親が外出したときに、結構な割合で「今日学校はどうしたの？」って言われるんです。うちの一家はまあ親子ともにあんまり気にしてないから「今日休みなんです」って言うんですけど。子ども休んでるので間違いは無いんで嘘は言ってないと思ってます。だけど、気にする人はそこはやっぱりすごくデリケートなので、お子さんにしてもそうやって聞かれると外に出づらい。心身の状態が回復してきてやっと外に出られるようになったときに、「今日学校どうしたの？」と言われてしまう。または言われるんじゃないかという恐れをもつことで、出られなくなったりということがあります。それって社会的なひきこもりの作り方だと思うんですよね。本人のことではなくて。なので、それを聞かないでってお店の人に言うのは難しいんだけど、うちは聞かないよってところを集めようということで、去年の8月の取組をしながらそういったカフェとか飲食店、それからアミューズメント施設、雑貨店とか、結構大事なんですけど理美容室。髪切りたいと思っ

ても何話しかけるかわからないっていうことがあると髪を切りに行けない、髪を切りに行かないとだんだんむさ苦しくなるから外に出づらくなるということが自分が田舎で不登校をしていたときにもありました。こういったリストを作って、それを参加していただいた人に共有するというをやっています。本当は公開したいんだけどそれはそれでそこに対して「お前の店は不登校を容認するのか」という人が現れかねないのがまたこの社会情勢なので、今は限定的に公開しております。

運営にあたって気を付けていることなんですけど、当事者や経験者、家族以外の支援をしたいという方についてはスタッフとして参加していただく。必ず事前にお申し込みいただいています。去年の8月のイベントがその後新聞に出たので、それを見てただ関心があるという方が「きみだけ」に来たことがあったんですけど、大変申し訳ないんだけどその方については入場をお断りさせていただきました。悪意が無いことはわかってるんですけど、コントロールできないんですよね、少人数の集いでどういった人かわからない方が見学者として入るっていうことが。ですので、基本的に当事者以外の方が運営スタッフになるということで参加していただいています。それから、人の話を否定しないということをアナウンスしています。お互いに不登校の子の親であっても、それは違うんじゃないかと言いたくなる時はあると思うんですが、その人の体験について否定をしないようにお願いしています。話せない子のために本とかゲームとか、一人で楽しめるものも用意しています。本については去年の8月のイベントのときに結構多めの寄付金をいただいたので、それでたくさん不登校関係の本を買わせていただいて、あと実行委員の人のおすすめの本とかを持ち寄って貸出をしたりもしています。

これは私が心掛けていることなんですけれども、学校にだんだん戻っていく子もいます。サポートルームから戻っていきたりとか、週に何回かだけ戻れるという子の話のときにも、「良かったね」とか「頑張ってるね」ということは言わないように

気を付けています。これはすごく難しいところで、今学校に行けなかったり外に出られなかったりする状態の子がそこにいるわけです。その子の前で学校に行ったということに対して「良かったね」ということは、学校に行かないことは良くないと言ってしまうことや、頑張っていないって言うてしまうのを背中合わせになっていると思っています。なのでこのあたりはすごくデリケートだなと思っています。

2回目からはお申し込みはいらないけれど、こちらからもメールとかで案内は出さないのホームページを更新しておくから来たいときに来てねというスタンスでいます。だから、「きみだけ」に参加してきている方も延べ人数で結構多くなっているんですけども、本名を知らない人もいます。連絡先とか。という感じで運営をしております。来月は8月18日の「#不登校は不幸じゃない」と合同で「きみだけ」もこれを合わせてになるので、その次の単体の「きみだけ」としては9月21日に開催をする予定です。もし何か関わりたいという方がいれば、事前にご連絡をいただいてスタッフ側としてお茶を用意するとか、子どもたちの遊び相手になるといった形で関わっていただくとありがたいです。

そんな感じで、自分の不登校体験から孤立しないための当事者の活動をつくっています。私自身は中学校を出てから結局戻ること無く、中卒のまま社会に出て行って劇団に入ったしその後会社勤めもしたし、今は自分で開業して在宅でいろんな仕事を受注してお仕事をしています。事務代行としてパソコンを使っているんなものもやっています。ライターとしての仕事をしたりとか、ここ数日は電子書籍のコーディングの仕事を受けていて、全く何が書いてあるかわからない物理学や電子工学のテキストをkindleで読める電子書籍にコーディングするというお仕事をしています。国立大学卒の夫に見せてもなんだかわからないという本のお仕事をしています。

自分自身はそれで社会に出て行けたんですけど、それぞれいろんなお子さんがいていろんな進路の

選び方があります。だけど、自分がたまたま札幌にいたからフリースクールに通えた、親が教員で母が専業主婦だったからそう裕福ではないんですけども、一応安定しているからフリースクールに行く。90年当時でも月謝35,000円しましたので。あと通勤定期しか買えなかったの、学割がきかなくて定期代も高かったんです。そういったお金を出してもらって、3年間フリースクールに行くことができたけれども、そういった環境になれば行けなかったですね。もっと地方に住んでいるとか親の収入が不安定だったりしたら行くことができなかつたと思ってるし、今もそれは残念ながら30年たっても変わらないです。だから小さい町で親がある程度安定した収入をもってないと、学校に行くしかない、教育を受ける機会がそれしかないという状況は変えていって自分の子どもに渡していきたいなと思って活動しています。

私からの発表は以上ですので、あとは座談会とかパネルディスカッションとか、ご質問のコーナーで受け付けたいと思います。あと何かあれば検索していただければホームページも「さいとうサポート」ブログも出てくるので、個人的にご連絡いただければと思います。ありがとうございました。(斎藤 美佳子)

5. パネルディスカッションに向けての情報共有

後半のパネルディスカッションに入るにあたり、本日お二人にお話いただいたことに関連してこれまで行われてきた不登校に関する調査結果を共有させていただきます。

一つ目は文部科学省による不登校生徒の追跡調査です。これは中学3年生のときに不登校だった子が5年後にどのように過ごしているか、5年後に自分の不登校経験を振り返ってどのように感じているか等をアンケートやインタビューによって明らかにしたものです。過去に2回実施されました。2014年に公表された2回目の調査結果は、2006年度に不登校だった中学3年生の5年後を調査したものです。先ほど斎藤さんのお話にあったように、1993年度に不登校だった中学校3年

生の5年後を調査としたひとつ前の追跡調査と比較して、不登校の子が大学に進学する割合が上がっています(6.6%から19.0%)。したがって、たとえ中学校で不登校であったとしても、それがただちに学校教育そのものからの離脱につながるわけではないと考えられます。

この調査でもうひとつ注目したいのが「中学校三年生の時に自分の将来について夢や希望がありましたか」という質問に対する回答の結果です。不登校状態にあった当時の自分に対する評価ということになりますが、夢や希望が「あった」と答えた方が22.2%なのに対して、「なかった」というのが41.3%です。しかし、その5年後に「自分の将来について夢や希望がありますか」という質問に対しては「ある」という方が43.5%、「ない」というのが20%ということで、具体的な数値の動き方はわかりませんが、5年後に自己評価自体が大きく入れ替わっていると予測されます。ただし、その自己評価が変わる大きな要因はどこで誰と出会うのか、どういう支援が受けられるのかということに影響されると考えられます。不登校という経験自体は変えられないにしても、それに対する解釈というのはその後の人生で変わる可能性があるといえます。それだけに、不登校の子どもがどこで、どういう支援を受けられるかが重要になってくるわけです。

不登校になった理由に関して最近立て続けに興味深い報告が出てきています。本日森先生と斎藤さんのお話がどうしても聞きたいと思ったきっかけとなったのが、NHKが2018年度に不登校状態あるいは不登校傾向にあった1,968名の中学生に対するアンケート調査です。不登校の要因について、文部科学省はいわゆる「問題行動調査」(文科省調査)で例年公表しているのがありますが、これは子どもが不登校になった要因を学校が推測して回答しているものです。文科省調査では本人に関わる要因や家庭に関わる要因が大きいとみられる傾向にあります。しかし、文科省調査と比較できるように設計されていたNHKによる調査の結果によれば、教員の回答と本人の回答の傾向に

大きな違いがあるのがわかります。とりわけNHKによる調査では、「教員との関係」が不登校の要因として大きな値を示しています(NHK調査23%:文科省調査2.2%。以下同じ)。他にも「部活動」(21%:2.7%)や「決まりや校則」(21%:3.5%)など、子どもによる回答からは、学校では当然だとされることや学校のあり方に関する要因が重視されています。とりわけ「いじめ」を要因とする不登校に関しては、文科省調査の結果を信用して良いのか疑わしくなる結果です(21%:0.4%)。この調査結果を見て、不登校に関しては学校から見えていることや学校でしか見えないこともあるんでしょけれども、学校にいるからこそ見えていないことがあるんじゃないかと感じました。そういう点で学校外の居場所や学校の外で支援をされている方のお話が聞きたいと思い、今回このような形で公開研究会を開かせていたわけです。

もうひとつ調査結果を紹介します。日本財団が2018年の年末に公表したものです。中学生の不登校は例年11万人ぐらいとされていますが、日本財団が中学生に対してアンケート調査を行ったところ、学校には行っているけれどいわゆる保健室登校ですとか、教室にはいるけどなかなか居場所として感じられない子どもたちを不登校予備軍だとすると、それは推計でおよそ33万人いるという数字が出ました。不登校について考える際は学校に来ていない子どもだけでなく、学校にいる子どもたちのことも同時に考えていく必要があるといえます。

これらを踏まえてどのような議論ができるかということなんですけども、先ほど教育機会確保法に関するお話がありました。休養の必要性が法律で明記されていますが、学校現場でこの法律がどのように解釈されているのだろうかというのも学校外で支援をされているお二人の視点から伺いたいところです。

さらに、不登校から生まれる学びもあるということで、先ほどの追跡調査のインタビュー調査では、自己理解が深まったり人に優しくされる経験が得られたり、時間を気にせず何かに熱中でき

たりと、学校に行けない代わりに経験していることを広く学びとして捉えることもできるだろうと思います。ただし、進路に関して将来どのような選択肢があるのかわからないということも追跡調査で指摘されています。本当はいろいろ選択肢があるんだけどそれが分からないということは、本人にも保護者の方にとっても将来に対する不安の原因になっているかもしれません。そういったところで当事者の会や多様な支援機関が重要な役割を担っているのだろうと思われまます。

最後に、長期的な展望として学校の機能や可能性を丁寧に見定めていくことも重要です。「学校に行けないからもうだめだ」、「学校が何もしてくれない」といった学校に対する依存や不信の背景には、学校に対するある種の幻想があるのかもしれませんが。昨今先生の働き方が問題とされるなかで、今以上の負担を学校に求めるのも難しい状況があります。不登校の支援に関して学校にできることとできないことを冷静に見極めて、その子にあった方法を具体的に選択していく必要があるかもしれません。

先ほど生産性のお話もありました。人数の大きいクラスでみんなが同じようにすることが求められる「工場モデル」の学校教育というのは、二次産業が中心の時代には機能していたのかもしれませんが。しかし、社会構造が大きく変わったときに、みんな一緒であることが期待される学校が本当に今の社会やこれからの社会に合っているのかどうか、それに合わない子が一定数いるのは当然だという見方もあります。この点に関して、不登校児童生徒への支援を通じた学校の変化が見受けられます。一例としては不登校特例校や最近では校内フリースクールというような形で、部分的ではありますが学校が変わりつつあります。これらは民間支援機関による学校外での様々な実績が公教育に影響を与えたものだと捉えられます。学校外での多様な支援を地域でどのように受け入れて、育てていくかが大事になってきます。

大まかな話ですけども、いろんな論点があり得るということを私からもお話させていただきまし

た。私からは以上ということで、後半の議論が深まればなと思います。(本山 敬祐)

6. パネルディスカッション (一部紹介)

6.1. 教育機会確保法について。現場にいると行き届いていない印象がある。この法律ができたことで風通しが良くなったのか、全く変わっていないのか。また、こういうことは学校から言われて実は困るとか、もしそういうのがあれば教えていただきたい。

森：今のお話について思うことは、この法律自体が制定されて間もないということも手伝い、現場に浸透していくのは時間がかかるだろうなと思います。ただ、関心ある先生方がおられるのも事実で、個人的に勉強されている先生が多くいらっしゃることも承知していますが、やはり集団になってしまうと、個人で感じるのと、学校、もしくは集団として動くことは別論理や集団としての意思決定ということもありますので、個の力はまだまだ日本の社会では難しいのかなと思います。

生徒さんのお話をよく聞いていると、生徒さんが朝迎えに来るとか、先生がプリントを携えてくるのは非常に気が重い。一人ひとり感じ方は違いますが、来てくれることに対して否定的に思う人もいれば、申し訳ないと思う人もいます。それは個人個人それぞれ感じ方に違いはあります。

今の質問の趣旨から離れるかもしれませんが、学校というとやっぱり先生という話が出ますが、事務員さんが結構問題だと捉えている方が多くて、そこは私も驚きました。各手続きをとるのが事務の方なので、口には出さないけれど悩んでいるのだ、と感じました。学校という単位ではあるけど、地域の一員としてもこのように悩んでいる一方で、その解決のために自分もなんとかしたいと思う人は案外いるものだなと思いました。

斎藤：去年「#不登校は不幸じゃない in 弘前」をやるときに教育委員会から後援をいただくことができました。後援をもらおうと学校に配布できるんですね。でもしばらくほかされていて、回答がきたんですが不承認だったんです。その理由として

は、まず公益的な団体やそれに準じる団体ではないこと、まあこのために立ち上げた実行委員会でまだ日が浅いことや、対象となる人が限られた人であることといったそもそもダメじゃんというところと、その「#不登校は不幸じゃない」というコピーやキャッチフレーズが不登校を無くすことを目標としている教育委員会の趣旨と合わないという文も入っていて、まだそこかなということが文書できました。こればらすと怒られるのかわからないけど。

ただ、フレンドシップルームの小笠原主事が当日来てお話をさせていただいたんですけど、この人がフレンドシップルームをやっている限りは私は信頼できると思っています。かなり学校っぽくない人なんです。最初見た時に私は脳科学者の茂木さんみたいな人が来たと思って、他のフレンドシップルームでお世話になっているお母さんは葉加瀬太郎がいたみたいな話をされていて、全然先生っぽい雰囲気のない人がやっていて。一応適応指導教室のがフレンドシップルームに変わったものではあるけれど、学校にすぐに戻そうということを目指しているところではないのはその先生から感じています。

ただ、全体としては教育委員会からそういった回答が来るし、小笠原さんがにっこり笑いながら話をしている姿がWEBに載ったがために、教育委員会や他の学校の先生からフレンドシップルームでは不登校を容認するのかとういお問い合わせがあったという話も後日聞きました。とういう意味では、まだ教育機会確保法は全然浸透していないし、対応もまだまだ属人的というか個人的なところに左右されるなということを感じています。そして、この法律も3年たつので見直し時期なんですけれど、家庭内に学校が入ってくるきっかけになるんじゃないかといことでは意見が分かれるところもあって。親に学習計画を提出させてそれを認めるようなフローを作ろうみたいな話も出てきているので、フリースクール関係者の人たちにとっても結構意見が分かれるなというのはいろんな関係者のTwitterをフォローしていて感じてい

るところです。ただ、波及はそこまでしていないなど実感しています。

6.2. 親と子どもの勉強に対する考え方が全然違う。親は勉強させたいし、子どもは居場所を求めてきていたりする。現場におられるお二人はどう思っているのか。

斎藤：私自身学校教育は小学校5年生からドロップアウトして、後はどうにかこうにか必要があればその都度自分で勉強してやってくるというやり方をしていて、私と一緒に不登校をしていた弟は小学校3年から不登校をしていたんですけども、彼の方はちゃんと通信制高校も卒業して高卒の資格も得て会社の正社員として働き続けていまして、小学校から中学校まで全然行かなかったのに通信制高校の課題をちゃんと提出して偉いなというのを感じております。

学校のカリキュラムに従った教科学習については、その気になれば結構取り返せると感じていて、私自身もフリースクールに通いながら大検を受けようと思って自分で参考書を買ってそれで勉強して。結構自分でやる気になってから勉強するとなんか4大文明の始まりとか、川があるところに文明が生まれていくんだとかいうのを知るのが楽しくてですね。文系とか簿記とかそういった系は大体取れて、あとは理科と数学だけはちゃんと勉強しないと1年目では到底無理だったので、ちゃんとどこかで勉強しないといけないなと思ながら社会にでちゃって今に至るという感じです。

だから、教科学習をするときに学校に行きたいのか、進学をして通信制にしても定時制にしても高校に進学をしたいと本人が思っているかどうかと、大学まで見据えて高認の勉強をするのか、それとも親に勉強しなさいと言われてるからなんかやらなきゃいけないのかなというのではモチベーションが全然違って。この子どもの勉強はモチベーションがかなり左右するので、毎日学校に行って毎日テストを受けたり文字を書いている人たちからすると定着は弱いかもしれないけれど、短期間で集中して勉強してテストをやる分につい

ては、割と短期間で取り返せるんじゃないかなという実感を自分の体験や弟の経験から見えています。

自分の子については低学年からの不登校なので、一応掛け算割算とか基礎学力はあった方が良くかなと思ってタブレット端末での学習を進めてやってるんですが、本人はあまりモチベーションが無く嫌々やっているの。これが終わったらSwitchができるというニンジンをおろ下げて毎日20分ぐらいでもやっていたら、いずれ学校に行くことになったときに一応見たことはあるとか、学校からプリントをよくもらってくるんですけども、プリントを見たときに、これやったことはあるよねっていうことを重ねておいた方が同世代に対するコンプレックスとかが少なくなるんじゃないかなと思って今は続けさせていますけど、あんまりこれが効果が無いようだったら、辞めても仕方がないかなという感じでやっております。

森：フリースクール自体では学習はしていないのですが、通信制のサポート校に通ってくる方で一人は上の学校に行きたいというので、勉強しているという形です。ただ、興味の無い科目はやる気がないようです。それはわかるので、必要最小限ぐらいは点数取ってねという話をしています。もう一人の方は中学校時代に不登校だったので、追いつきたい、という気持ちを強く感じます。だから数学にしても結局いわゆる高校入試の計算問題を復習しています。印象としては本人が非常に素直でやる気があるので、中学校の復習も今からやれば別に取り返せるだろうと思っています。将来の希望に関して質問すると、漠然としたものはあるけど明確なものは無い。だから上の学校に行くかもしれないし、それは3年かけて探していくという話をしていました。

加えて、一人親家庭の学習支援のお手伝いをしたことがあって、あの時はおやつにつられてくるお子さんたちが結構いらっやいました。それはそれで当たり前だよな、という思いがあります。ただ、そういうふう学習する場で気が付く子どもが中にはいて、自分がこういうことをすれば将来ああいうこともできるだろうとか、そういう

話をするお子さんもお出でです。人によっては勉強する意欲みたいなものを感じて自分の将来はこういうふうにして開けば良いのかなという話をするお子さんもお出ででした。逆にいろいろ教えられて勉強になったという感じはします。そういった意味では居場所って大事なのかなという印象です。

6.3. フレンドシップルームとフリースクールの違いについて

森：私もよく分かっていません。ただ、本人がフレンドシップルームにいつも行けたりしたら、午後でも良いからちょっと寄れば良いじゃないかと。同じ学区の子に会うとまずい時間帯とかあるじゃないですか。そういう時間帯にここに来ればいいのでは、のような感じていました。残念ながら資金不足でフリースクールはお休みしていますが、そういう立場でやっていたので、勉強がわからなければちょっと一緒にやるかとか、さっきの話ではないけれど稲刈り一緒に行くかとか、そんな感じのその方との取っ掛かりを探しながら、その途中でいろいろ見つけられれば良いんじゃないの、というおせっかいというか、ゆるい感じです。

斎藤：たぶん適応指導教室とかそういうのが出てきたって1992年頃ですよ。最初は適応指導教室っていう名前だから嫌な感じて思っていたんですけど、だんだん各地で名前が変わってきて、公的ところがやっているか民間がやっているかというところが制度としては一番大きくて。私が通っていたフリースクールも月謝それだけかかっていたし、それでも資金不足にしょっちゅうなっていて経営に波があって今はやっていないしってことがあるので、公がお金もかからないでああいうところをやっているのはすごく時代が変わったなというところと、それもその場所に関わっている人たちの不登校に対する捉え方で結構違いがあるので、弘前はあの人がいる限りは良いと思うんだけど、他の町とか、弘前でも小笠原さんがいなくなった後とかどういふふうになるのかなとは感じています。実際にフリースクール

というのは制度的には何も整っていないので、私塾を開いているのと同じ感じです。

6.4. 個の尊重とはどういうことか

森：個の尊重というと本当に難しく、今来ているのは15歳と17歳です。その時に個の尊重をどのぐらいまでしていいのかというのは確かに難しいなと思っています。ただ、いろいろお話をした中で、本人が言ったことはまず否定はしないようにしようというのが一つあります。それだけは駄目だとか、何考えてる、というのは多分今まで散々されてきただろう、というのはちょっと感じることはあるので、一端今は「そういうふうに考えているのだね」というような言い方をして受け入れるというか、そういうことを心掛けています。実際にできているかはわからないですけど、そういうふうにしちゃべって顔が「できるわけない」みたいな表情をもしかしたらしているかもしれないけれども、とりあえずそういう話で受けようと努力しています。

ただやっぱり移ろいやすい年ごろですので、日々変わるだろうなということは一方向で思っています。それはそれでまた受け入れつつ、本人から何か質問や相談があれば聞きながら。進学とか実際にお金がかかることであれば親御さんを交えて話をしましょうか、という感じになっています。

斎藤：私がフリースクールにいたころに、決まりというのは特になくて。何時に行っても良いし何時に帰っても良いし。勉強しても良いししなくても良いし。いろいろ用意されているプログラムもあるけれど参加しなくても良いというなかで、自分がどれを選ぶとか、それからこの子がやりたいことと私がやりたいこと違うけれども同じ時間を過ごさなければならないときにどうするかとかっていうことを、すごく何回も話し合いをしたし、子ども同士が集まっているのでいじめまではいかなくてもトラブルは発生するんですよね。そういうときにスタッフが叱るんじゃなくて、みんなミーティングっていうのをどう思うとか、こういうことを話し合うというすごく時間

をかけてやっていて、そういう中で自分が思うことと相手が思うこと、その全体の間がどうありたいかということと調整をしていくのを鍛えられたというか、上からルールとして定められるんじゃなくて自分たちが話し合っつけていくんだということを体験していました。それは劇団に入ってからでも、創造物って正解が無いので自分はこうだと思うとか演出家はこうだと思うとかのぶつかり合いでやってきたかなと思います。

今「きみだけ」をやっているけど、私の考えで全部染めるんじゃなくて、学校に戻りたいと思っている子や、本当は学校に戻って欲しいと思っている親の気持ちも否定しないようにしようということを心掛けています。

小野：個の尊重という話を持ち出したのは私なんですけれども、先ほどの教育機会確保法の流れの中で一つだけ付言しておく、教育関係のいろんな法律があるんですけど、教育機会確保法はその手の法律の中で唯一児童の権利条約というものに言及しているんですよ。児童の権利条約は日本も入っている条約で日本も締約国である以上書いてあることはちゃんと守らなければならないというふうなことなんですけど、その児童の権利条約の中に児童の最善の利益という言葉が出てくるんですね。こちらは子ども家庭福祉とか児童福祉の分野では必ず出てくる重要な言葉なんですけれども、不思議なことに教育という場面になると出てこなくなるというのを私がこの大学でいろいろ教えている中でなんでだろうなと思っていたところでした。そういう中でこういうテーマでやってみないかということをお本山先生にもちかけて今日このような形で開催に至ったというわけです。

6.5. まとめ

小野：今日は暑い中お越しいただき、また議論に参加していただいたことを大変感謝しています。いろいろと不十分な点もあったかと思いますが、おかげ様で充実したものとなったと思います。今回は不登校の問題を取り上げたんですけど、不登校の原因とか、不登校は問題っていう取り上

げ方をされる背景にも学校に行くのが普通で行かないのがおかしいという固定観念があって、その固定観念からはずれた一人一人の個人というものが社会から排除されてしまうというところがあるわけです。

個の尊重という話は憲法に書いてあるようなことではあるんですけども、その背景にある思想というのは寛容の精神と言われることがあります。一人ひとりの個や一人ひとりの私を尊重するということは、お互いにそれを認め合うということですから。歴史を遡ればキリスト教はカトリックとプロテスタントに分かれて大戦争をしたんです。あれも結局はカトリックのほうはプロテスタントのやっていることは認めない、プロテスタントの方はカトリックのやっていることは許さないとやってお互い喧嘩になってそれが戦争になってしまったというものだったんですけど、それはもっとミクロなものに移せばいじめの問題だってそういうところもあるわけです。もちろん全てではありませんけど。一人ひとりが違っていても良いはずなのに、違うことが悪いことであるかのように捉えられる社会というのは本来健全ではないと、一人一人違う私がいるわけで。とはいってもどうしても同じにしなければいけないと、みんなに合わせなきゃいけなくなったりする場面もあるわけですよ。それは決まり事ということになるわけですけども、どうしてもそういうふうなところでは私はみんなに合わせなければいけないというところもあるんですが、それはその私だけが我慢しているのではなくて、また別の場面で同じように我慢する必要があると。そういうお互い様っていうところがあるから我慢するのは仕方が無いと見出すことができるわけです。そうやってみんなの幸せが保たれて私の幸せも保たれるというところもあるわけです。いずれにしても根底にあるのは一人ひとりを尊重すること、認め合うことが大事にわけです。自分だけが合わせて不利になるのは結局不平等だということになりますので、それはそういうルールの作り方がおかしいというような話になるのではとと思っているわけです。

私は現場のことは何も知らない一介の法律研究者なんですけど、すごく抽象的なことしか言えないんですけども、いろいろ個別具体的なお話を聞きながら私も理解を深められたらと思いますし、私も学校教育の私とみんなというのを地域の人たちと考えていければなと思っております。それでは、時間が過ぎてしまって申し訳ございませんでしたが、今日のところはここまでとしたいと思います。最後に今日来ていただいたゲストのお二人に拍手でもって感謝を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

注

- ¹ ジョブカフェとは、都道府県が主体的に設置する若者の就職支援をワンストップで行う施設を指す。厚生労働省も都道府県の要望に応じてジョブカフェにハローワークを併設し、職業紹介等を行うなど、都道府県と連携しながら支援に取り組んでいる（厚生労働省ホームページ参照）。
- ² 域若者サポートステーション（通称サポステ）は、働くことに踏み出したい若者たちと向き合い、本人や家族だけでは解決が難しい働き出す力を引き出し、職場定着するまでを全面的にバックアップする厚生労働省委託の支援機関を指す（厚生労働省ホームページ参照）。
- ³ フリースクールネットワーク全国ネットワークの詳細については、同団体のホームページを参照されたい（<https://freeschoolnetwork.jp/aboutus> 最終アクセス 2019年11月17日）。
- ⁴ 教育機会確保法が成立した経緯や附帯決議については2016年12月22日に出された文部科学省初等中等教育局長通知「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律の公布について（通知）」に詳しい。
- ⁵ 生活困窮者支援制度は2015年4月に導入され、働きたくても働けない、住む所がないといった生活全般にわたる困りごとに関する相談窓口が全国に設置されている。相談窓口では一人ひとりの状況に合わせた支援プランを作成し、専門の支援員が相談者に寄り添いながら、他の専門機関と連携して解決に向けた支援を行う。
- ⁶ 詳細については次のホームページを参照した。「不登校は『家庭が原因』？教員と生徒で食い違いNHKによる中学生1968人調査で見えた実態」

(<https://toyokeizai.net/articles/-/283662> 最終アクセス 2019 年 11 月 20 日)。

参考文献・資料

不登校生徒に関する追跡調査研究会 (2014) 『不登校に関する実態調査 平成 18 年度不登校生徒に関する追跡調査報告書』。

今津孝次郎 (2017) 『新版変動社会の教師教育』名古屋大学出版会。

NHK スペシャル「シリーズ子どもの“声なき声”第 2 回 “不登校”44 万人の衝撃」(初回放送 2019 年 5 月 30 日)。

日本財団 (2018) 『不登校傾向にある子どもの実態調査報告書』。

苦野一徳 (2019) 『「学校」をつくり直す』河出書房。

渡辺位 (2006) 『不登校は文化の森の入口』東京シューレ出版。